様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３５４１３
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１２８８１

研究課題名（和文）会話におけるメタファー使用の動的・協働構築的プロセスに関する研究

研究課題名（英文）Research on the dynamic/collaborative process of using metaphors in conversation

研究代表者
杉本　巧（Sugimoto, Takumi）

広島国際大学・看護学部・准教授

研究者番号：１０３３５７１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、会話におけるメタファー使用に関して、以下の三点の研究成果を得た。第一に、会話分析の立場から、会話でのメタファーの出現位置に注目し、メタファーが会話の相互行為のなかで、相手の語りの理解を示す資源として用いられることを明らかにした。第二に、同じく会話分析の立場から、しばしばメタファーと共起する「こう」が、話し手の発話に対する聞き手の理解や反応を方向づけるという相互行為上の働きを持つことを明らかにした。第三に、認知メタファー理論の立場から、会話の中でメタファーが動的に展開する様を観察し、会話に現れる非日常的で創造的なメタファー表現を既存の概念メタファーと結びつける方法を具体的に示した。

研究成果の概要（英文）：Using conversation analysis and cognitive metaphor theory, this collaborative research aims to analyze the dynamic/collaborative process of using metaphors in conversation. First, using conversation analysis, we focused on the position of metaphors in Japanese casual conversation. We found that the metaphor is used as a resource to prove the recipient's understanding of the upshot of the speaker's story in conversation. Second, again using conversation analysis, we clarified that the Japanese koo ("like this"), which often co-occurs with metaphors, has an interactional function in directing the recipient's understanding and reaction to the speaker's utterances. Finally, we observed the dynamic development of metaphors in conversations from the viewpoint of cognitive metaphor theory. Thus, we demonstrated how unusual and creative metaphors in conversations connect with existing conceptual metaphors.

研究分野：言語学

キーワード：メタファー　会話　相互行為　会話分析　認知メタファー理論　概念メタファー

１．研究開始当初の背景

認知メタファー理論の嚆矢である Lakoff and Johnson (1980)は、メタファーの本質は「あるモノゴトを通して他のモノゴトを理解すること」であり、人間の思考、そして日常的活動に不可欠であるとも指摘した。それを承け、言語学、心理学、脳科学等でメタファー研究が盛んに行われてきた。その中で、各種の談話やコーパス（対話、演説、インタビューなど）をデータとして、メタファーの働きを明らかにしようという研究も増えてきた。だが、最も日常的で、人間の社会的活動の基盤をなす活動である会話をデータとして、そのなかでの動的なやりとりに現れるメタファー（表現）を扱った研究はない。メタファーが、人間の思考及び日常的活動で重要な役割を果たしているとするならば、それが会話のような動的で相互行為的な言語使用場面で、どのように働き、何が成し遂げられているかといったことを明らかにすることには大きな意義があると考えた。

２．研究の目的

本研究課題は、認知言語学（認知メタファー理論）と会話分析の研究者による共同研究である。研究期間において、それぞれの立場から、会話のやりとりにおける言語表現としてのメタファー（以降「メタファー表現」）と認知機構としてのメタファー（以降「メタファー」）について、その出現の態様、前後の言語形式、発話の連鎖、談話展開との関係等について分析を行った。それにより、これまでのメタファー研究では示すことができなかった、実際の会話場面におけるメタファー（表現）使用の動的プロセス及び会話参加者間でのメタファー（表現）の協働構築的なプロセスを解明することを目的とした。

３．研究の方法

本研究課題では、研究代表者、研究分担者、研究協力者が、現実に行われた会話の録画、公開されている会話の映像や音声、文字化資料、テレビで放映されたインタビュー番組等をデータとし、それぞれの理論的立場、方法論に従って分析を進めた。

(1) 研究代表者・杉本巧は、日常的な話題設定をしていない会話を録画し、会話分析の手法により、分析を行った。特に、会話において行為をつくり出すための資源としてメタファー表現を捉え、メタファー表現がどのような発話連鎖上の位置で用いられ、どのような相互行為上の課題解決に向けて用いられているかという点を重点的に観察した。注目するメタファーが出現している場面について、その発話の組み立て（統語形式や韻律的特徴などの形式的特徴）とやりとりにおける配置（前後の発話や動作とのつながり、タイミング）を精緻に分析した。

(2) 研究分担者・串田秀也は、研究協力者・林誠とともに、特にしばしばメタファー表現と共起するフィラー的形式「こう」の相互行為上の働きに着目した。そして、会話分析の立場から対面会話と電話会話に見出された 182 ケースのフィラー的「こう」をデータとして、その相互行為上の働きを調べた。

(3) 研究分担者・鍋島弘治朗は、研究協力者・中野阿佐子とともに、認知メタファー理論の立場から、テレビ番組のトーク場面やインタビューをデータとして、談話におけるメタファーの動的展開について分析を行った。

４．研究成果

本課題の研究成果について、大きく三つに分けて述べる。なお、下記の成果については、平成 29 年 12 月に広島国際大学で「科研費研究成果報告会」（日本語用論学会メタファー研究会と同時開催）を開催し、広く公表した。

(1)　研究代表者・杉本巧が中心となり、相

互行為の資源としてのメタファーについて、以下の研究成果を得た。

メタファーに関する先行研究では、会話のやりとりにおいて、メタファー表現を含む発話が発されるタイミングには関心が向けられていなかった。Drew and Holt (1988、1998) は、会話分析の手法でイディオム（idiomatic expression: クリシェ、ことわざなど含む）や慣用的な比喩表現（figurative expression: had a good inning、take with a pinch of salt など）の相互行為上の働きを明らかにした。本研究は、その観点と手法を参考にし、メタファー表現を資源とする発話の連鎖上の配置と発話の形式を観察した。データは、話題設定をしていない親しい者 2～4 名の会話（15 組、計約 10 時間）、日本語話し言葉コーパス(Corpus of Spontaneous Japanese : CSJ) 』（国立国語研究所・ 情報通信研究機構・ 東京工業大学）、『BTSJ による日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト・音声）2011 年版』（宇佐美まゆみ監修）、“Talk Bank Project” (MacWhinney 2007) の CALL FRIEND／CALL HOME（電話会話）と、Sakura（4 名の学生による対面会話、映像あり、計 7.5 時間）を使用した。

その結果、話し手のある事柄に関する語りが完了した位置において、受け手の反応として発される発話にメタファー表現がしばしば含まれることを見出した。

語りの完了位置は、行為連鎖上、受け手が話し手の語りをどう理解したか、どう評価したかを示すことが期待される位置である。その際、理解を示す方法には、弱い方法と、より強い方法(Sacks 1992，串田 2006)がある。弱い方法は、理解を「主張・言明（claim）」することで、「わかる」「なるほど」等と発するという方法がある。より強い方法は、理解を「立証（prove）－陳列（exhibit）」することで、「自分が理解したかどうかを相手が分析して見つけ出すことができるような発話を行うこと」（串田 2006，233）である。具体的な方法には、「第二の物語り」(串田 2006，Sacks 1992)、セリフ発話（山本 2013）などがある。

語りの完了位置で発されるメタファー表現は、語りの要点について、その要点が顕著に当てはまるモノゴトにたとえる形になっている（例えば、計算に関する「反復練習の必要さ」という要点について、「運動」にたとえる、など）。語り手はそのメタファー表現を理解することで、自分の語りの要点を受け手が理解できていることを、分析的に理解可能となる。すなわち、メタファー表現は、受け手が、語りの要点が理解できていることを証拠立てるための資源として利用されているのである。

以上は暫定的な成果であるが、さらにデータを収集しながら、メタファー表現の相互行為の資源としての性質について、より精密な記述を目指したい。

(2) 研究分担者・串田秀也と研究協力者・林誠が中心となり、会話におけるフィラー的「こう」の働きに関して以下の研究成果を得た。

会話の中でしばしばメタファーと共起する言語成分として、フィラー的な「こう」がある。先行研究では、フィラー的「こう」の働きとして、心的に思い浮かべられた対象を言語化するときに言語表現の生成を助ける（小出 2010）、身ぶりと共起する場合には話し手が視線を向けた身ぶりを発話の文脈として指し示す（Streeck 2009）などが指摘されている。ただ、身ぶりと共起しない場合も含めて、「こう」が相互行為の中で聞き手に対してどのような働きを持つのかはまだ十分に知られていない。本研究では、対面会話と電話会話に見出された 182 ケースのフィラー的「こう」をデータとして、その相互行為上の働きを調べた。いずれの場合も、「こう」

はなんらかの事態を描写する表現に随伴して用いられるが、共起する他の言語成分や発話産出上の特徴から、大きく2つの用法を区別することができる。第一は、話し手がある事態を描写するにあたって、その事態を現場で行為者ないし目撃者として経験しているというスタンスを示すことで、その発話を通じて遂行している行為の説得力を高める働きである。この働きを持つ「こう」は、概して、短く発話されて他のフィラーも共起しないために、発話の進行は最小にしか滞りを見せない。また、ストレートな描写表現や引用やオノマトペに随伴することが多い。第二は、話し手が思い浮かべているにもかかわらず言葉で描写することが困難な事態を、表現する努力をしていることを表示し、後続する描写表現が精確ではない可能性に注意を喚起する働きである。このタイプの「こう」の場合、概して、音が引き延ばされたり、前後にポーズが置かれたり、「なんか」「なんてゆうか」などの他のフィラーが共起したりすることで、発話の進行が大きく滞る。また、メタファーや類比などの表現と共起する警告があり、ストレートな描写表現と共起する場合には言い直されたり表現の適切性に留保がつけられたりするなど、有標化される。以上のように、「こう」は話し手の発話に対する聞き手の理解や反応を方向づける相互行為上の働きを持つことが明らかになった。今後は、「こう」の現場指示的用法とこれらのフィラー的用法との関係を視野に入れてより体系的な記述を行うこと、オノマトペやメタファーなどの表現の相互行為的働きをその観点から捉え直すことが課題となる。

(3)研究分担者・鍋島弘治朗と研究協力者・中野阿佐子が中心となり、以下の研究成果を得た。

本研究はメタファーの会話分析による研究となっており、非常に独自の研究である。その意義はいくつか存在している。第 1 に、談話や会話の中におけるメタファーの登場位置を特定するというものである。第 2 に、談話の中でメタファーが動的に展開するさまを観察するというプログラムである。最後に、談話の中で登場する非日常的で創造的なメタファー表現を、既存の概念メタファーと結びつけるというプログラムである。

鍋島（2016，2017a）は、談話の中で動的に展開するメタファーを論じたものである。この考え方に従えば、慣用的なメタファー表現は、メタファーの全体性（イメージと写像）を展開するための「種」のようなものであり、談話は、その発芽を助ける庭ということになる。

鍋島(2017b) では、「みんなのメタファー分析」と称して、談話や会話の中でよく登場するメタファーを既知の概念メタファーと結びつける方法論を論じた。具体的には、「型はふんどし」という創造的メタファー表現が、いかに場所論理を応用した事象構造メタファーの１種として把握できるかを論じた。

以上の研究は国際的に見ても非常に先進的なものであり、今回の研究とこれに続く研究は、今後さらに発展させることが可能であり、国際的なメタファー研究の中でリーディングポジションを築いていくことが可能であると考える。

＜引用文献＞

① Drew, P. and Elizabeth H. 1988. Complainable matters: The use of idiomatic expressions in making complaints. *Social Problems*, 35(4), 398-417.

② Drew, P. and Elizabeth H.1998. Figures of speech: Figurative expressions and the management of topic transition in conversation. *Language in Society*, 27(4), 495-522.

③ 串田秀也（2006）『相互行為秩序と会話分析：「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化』世界思想社
④ 小出慶一（2010）「日本語学習者の発話に見られるフィラー「こう」について」『埼玉大学紀要(教養学部)』46巻2号，99-112
⑤ Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live by.* Chicago: University of Chicago Press.
⑥ MacWhinney, B. 2007. The TalkBank Project. In Beal, J., Corrigan, K. & Moisl, L. *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases, Vol.1.* Houndmills, Basingstoke,Hampshire, Palgrave-Macmillan.
⑦ 鍋島弘治朗（2016）「メタファー――言葉と身体性から談話と共同行為へ」広島島大学総合科学研究科「言語と情報研究」プロジェクト第60回公開セミナー
⑧ 鍋島弘治朗(2017a)「メタファー、談話、社会、認知言語科学研究会＜談話研究と認知・機能言語学の接点＞テーマセッション
⑨ 鍋島弘治朗（2017b）「みんなのメタファー分析―創造的メタファーを既知の概念メタファーへ関連づける方法に関する試論―」科学研究費研究課題成果報告会
⑩ Sacks, H. 1992 ‘First’ and ‘Second’ stories; Topical coherence; Storing and recalling experiences. In *Lectures on Conversation*. 2vol. 249-260. Oxford: Blackwell.
⑪ Streeck, J. 2009. *Gesturecraft*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
⑫ 山本真理（2013）「物語の受け手によるセリフ発話―物語の相互行為的展開」『社会言語科学』16(1)，pp. 139--159.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計９件）

① 杉本巧(印刷中)「会話分析とメタファー」査読無し、メタファー研究第１号
② 杉本巧（2017）「会話データの収集方法」査読無し、日本語用論学会第19回大会発表論文集第12号、255-258
③ 杉本巧（2017）「メタファーの配置と相互行為」査読無し、日本語用論学会第19回大会発表論文集第12号、259-262
④ 中野阿佐子（2017）「話の展開とメタファー写像―認知メタファー理論の観点から―」査読無し、日本語用論学会第19回大会発表論文集第12号、263－266
⑤ 串田秀也・林誠（2017）「「こう」を随伴する描写」 査読無し、日本語用論学会第19回大会発表論文集第12号、267－270
⑥ 杉本巧（2016）「会話をデータとするメタファー研究の意義と展望（研究ノート）」査読無し、広島国際大学総合教育センター紀要創刊号、151-163
⑦ 鍋島弘治朗・中野阿佐子（2016）「MIP－理想のメタファー認定手順を求めて－」査読有り、英米文学英語学論集５巻、1-18
⑧ 中野阿佐子（2015）「メタファー特定に関する研究の現状とその展望」査読無し、人工知能学会第２種研究会ことば工学研究会資料50、2015、53-66
⑨ 鍋島弘治朗(2015)「フレーム、スキーマ、スクリプト ―身体性メタファー理論の基礎となる類似概念の系譜と整理―」査読無し、人工知能学会第２種研究会ことば工学研究会資料50、2015、39-51

〔学会発表〕（計15件）

① 杉本巧「会話分析とメタファー―相互行為の資源としてのメタファー―」日本語用論学会メタファー研究会、2016 年 03 月17日、関西大学（吹田市）
② 鍋島弘治朗「脳科学とメタファー」日本語用論学会メタファー研究会、2016年03

月 17 日、関西大学（吹田市）

③ 中野阿佐子「メタファー特定に関する研究の現状とその展望」第 50 回ことば工学研究会、2015 年 12 月 18 日～19 日、千葉大学（千葉市）

④ 鍋島弘治朗「フレーム、スキーマ、スクリプト ―身体性メタファー理論の基礎となる類似概念の系譜と整理―」第 50 回ことば工学研究会、2015 年 12 月 18 日～19 日、千葉大学（千葉市）

⑤ 鍋島弘治朗・中野 阿佐子「シミリとメタファーの境界―シミリを導入する表現の分類に関する一提案」関西言語学会第 41 回大会、2016 年 06 月 11 日、龍谷大学（京都市）

⑥ 中野阿佐子「コーパスを利用したメタフォリカル・パターン・アナリシス（MPA）の紹介」日本語用論学会メタファー研究会 夏の陣－感情的なメタ ファー－2016 年 7 月 2 日、京都大学（京都市）

⑦ 杉本巧「会話データの収集方法」日本語用論学会第 19 回年次大会ワークショップ 2016 年 12 月 10 日、下関市立大学（下関市）

⑧ 杉本巧「メタファーの配置と相互行為」日本語用論学会第 19 回年次大会ワークショップ、2016 年 12 月 10 日、下関市立大学（下関市）

⑨ 中野阿佐子「話の展開とメタファー写像―認知メタファー理論の観点から―」2016 年 12 月 10 日 日本語用論学会第 19 回年次大会ワークショップ、2016 年 12 月 10 日、下関市立大学（下関市）

⑩ 串田秀也・林誠「「こう」を随伴する描写」2016 年 12 月 10 日 日本語用論学会第 19 回年次大会ワークショップ、2016 年 12 月 10 日、下関市立大学（下関市）

⑪ 杉本巧「語りの受け手の理解を示すメタファー－会話分析によるメタファー研究の一事例－」科学研究費研究課題成果報告会、2017 年 12 月 9 日、広島国際大学（広島市）

⑫ 鍋島弘治朗「みんなのメタファー分析―創造的メタファーを既知の概念メタファーへ関連づける方法に関する試論―」科学研究費研究課題成果報告会（2017 年 12 月 9 日、広島国際大学（広島市）

⑬ 串田秀也・林誠「「こう」と共起する表現について：イディオム的・借り物的表現を中心に」科学研究費研究課題成果報告会 2017 年 12 月 9 日、広島国際大学（広島市）

⑭ 鍋島弘治朗「メタファー――言葉と身体性から談話と共同行為へ」広島島大学総合科学研究科「言語と情報研究」プロジェクト第 60 回公開セミナー、2016 年 12 月 16 日、広島大学（東広島市）

⑮ 鍋島弘治朗「メタファー、談話、社会」認知言語科学研究会＜談話研究と認知・機能言語学の接点＞テーマセッション、2017 年 3 月 20 日、東京大学（東京）

〔図書〕（計１件）

① 串田秀也・平本毅・林誠（2017）『会話分析入門』勁草書房、334 ページ

６．研究組織

(1)研究代表者
杉本　巧（SUGIMOTO, Takumi）
広島国際大学・看護学部・准教授
研究者番号：１０３３５７１３

(2)研究分担者
串田　秀也（KUSHIDA, Shuya）
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：７０２１４９４７

鍋島　弘治朗（NABESHIMA, Kojiro）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：９０３４０６４５

(4)研究協力者
林　誠（HAYASHI, Makoto）
中野　阿佐子（NAKANO, Asako）